

Lalitavistara に関する一考察

—Trapusabhalika 品を中心として—

松原 秀道

Lalitavistara [=LV] (ed. Lehmann) の成立上の問題、特に『普曜経』との関係については、まだ十分に解明されているとはいえない。本稿では、特に成道後、Trapusa と Bhalika という二人の供養を中心に、他の主な仏伝資料を考慮に入れて考察したい。

仏伝資料は多数存在し、記述の仕方も様々であるが、主要な事項には大きな差異がない。ここでは、その共通的な事項が織り成す一連の物語を、詳細な記述は一応除外した上で、一つの枠組みとして捉えてみる。周知のように、經典等は後代に向かうほど様々な付加や増補がなされるが、仏伝にとつては、枠組み自体を取り崩してしまふことは重大な改変を意味するために、物語の枠組みはそれほど変化しているとは思われないからである。そこで、本稿では種々なる仏伝を、二人の供養が仏成道より初七日後（七七日以前）であるか、あるいは七七日後であるかによって大きく分類してみる。

まず、初七日後に位置づけるものとしては、『四分律』『五分律』『太子瑞応本起経』『普曜経』『根本有部毘奈耶破僧事』、*Calispāri-sāstira* [=CPS] (ed. Waldschmidt)、『衆許摩訶帝経』等があり、七日間の結跏趺坐—二人の供養—風患が襲う—ハリータキー果の供養を受ける—ムチリンダ竜王のもとへ到る、という基本構造をと

っている。また『仏本行集経』における異説は三七日後、パーリ律『小品』は四七日後に二人の供養を置く。『過去現在因果経』、チベット訳『ブツダチャリタ』³⁾は日数を示さず、その構成も他のものとは大幅に異なるが一応ここに分類する。この中で、『四分』(大二二、七八二下以下)、『五分』(同、一〇二下以下)、『仏本行集』の異説(大三、八〇四上)は、供養後説法躊躇に至るまでに、鬱鞞羅村(『仏本行集』は村名を出さず)に入り、二婦依(『仏本行集』は三婦依五戒)を授けることを述べているが、『四分』では文勝竜王宮に到るのが六七日後であり、『五分』では成道後直ちに風患が襲ってくる。『太子瑞応』(大三、四七九上以下)は二七日後に竜王の水辺より石室へ到り十二縁起を觀するが、『普曜』(大三、五二四下以下)ではほぼ同じ記述でありながら、二人の供養後の風患より竜王のもとへ到る事跡が抜けて他の要素が入っている。『破僧事』(大二四、一二四中以下)、『衆許』(大三、九五〇下以下)は共に同じ構成となっており、成道後直ちにカピラ城の話題が出てラーフラの誕生を述べるといふ特異性をもつ。また、供養後の風患と魔王の涅槃の勧めが組み合わされ、十二縁起を觀することを二七日後の商人の供養後に置く。CPS (p. 74 ff.) はカピラ城の話を述べないが、以下はほぼ『破僧事』に同じ。『小品』(pp. 16)は、内容的には他のものと大きな差異はないが、二七日に驕慢な婆羅門の話を述べ、供養前の三七日にムチリンダ竜王の記事が入る。

次に、二人の供養を七七日後に位置づけるものとしては、LV、『方広大莊嚴経』*Mahāvastu* [=Mo] (ed. Senart) *Jātakaṅkā-nakaha* [=NK]、『仏本行集』等があるが、成道後より二人の供養までの間に種々な事項が挿入されている。ここで重要なのは、

LV (p. 377 ff.)、『方広』(大三、六〇一上)の四七日、*M₂* (III, p. 281 ff.)の三七日、*NK* (p. 78 f.)の五七日に見られる。成道後の魔王と三魔女の登場である。これは、魔王が打ち負かされて沈んでいるのを見て三魔女が仏を誘惑しようとするが、老婆にされるという話である。この話がここに置かれることは仏伝の構成を考へる上で注意すべきことである。二商人の供養を初七日後に置くものの中で降魔を述べるものはすべて、成道前に三魔女(『普曜』は四魔女)が登場し、三魔女登場を成道の前に置くか、あるいは後に置くかによって、仏伝の構成に特徴が見られるのである。

以上の如く、一つ一つの事項はおおよそ共通であっても、物語の中に組み入れられることにより、各々の特異性が出てくる。『四分』等のグループの特に二商人供養後の部分は、律蔵の二掃依の起源的なものを説明していると思われ、相違は部派所伝、あるいは成立時代の違いに由来すると思われる。『太子端応』と『普曜』にはかなりの類似点が見られ、『破僧事』、*CPS*と『衆許』は同じ有部系と言つてよいであろう。『衆許』の訳出が宋代とかなり後代であるのに、その構成は変わっていない。パーリ系は小品と*NK*に差異があるが、『小品』の二商人の供養が比較的遅く、他の事項が入りうる余地があったのであり、構成上、LV等との関連も考えうる。

さて、LVの現形は大乗経典であることが一般に認められてくるが、その成立経過については諸説がある。例えば、ヴァンデルヒッスは有部系のテキストとの関係について示唆し、学者は概ね有部よりの発展を認めている。この説の大きな根拠となるのは、『仏本行集』の跋文に見られる「薩婆多部名此経為大莊嚴」(九三三上)の「大莊嚴」をLVに当てたことによる。ちなみに、異本の一つとされる

『普曜』の現形はそれ自身が「大方等法」(五三〇下)であると述べて、経録では方等部と小乗部の両例がある。だが、物語の構成より見ると、前述の如く有部系には独特の伝承があり、それが比較の後代まで保たれたと考えられ、二商人の供養を中心として考察した本稿の範囲では、LVと有部の繋がりを積極的に認めることができない。さらに、現形の『普曜』は内容上確かにLVに相当する部分も存在するが、幾つかの要素のうちの二つがLVとも考えられ、物語の構成より見る限りでは、両者が異本であるということについては再考が必要であろう。

- 1 七日思惟↓般涅槃決意↓大梵天勸請↓説法決意↓婆羅捺國へ向かう↓二商人供養↓外道優婆伽との邂逅↓目真竜王の保護(大四、六四二下以下)。
- 2 七日結跏趺坐↓説法躊躇↓二梵天勸請↓説法決意↓四天の鉢供養↓二商人供養 (F. Weller, *Das Leben des Buddha*, 1928, S. 248 ff.)『仏所行讚』もほぼ同じ(大四、二八中)。
- 3 例えばLVでは、菩提樹を凝視↓三千大千世界の大経行↓瞬きもせず菩提樹を凝視↓東西大海小海の小経行、悪魔・魔女登場↓ムチリンダ竜王のもとへ到る↓諸外道に偈を説く↓ターラーヤナ樹のもとで二商人供養 (pp. 369-392)。
- 4 平川彰『律蔵の研究』五四一―五頁。
- 5 M. Winternitz, "Beiträge zur buddhistischen Sanskritliteratur", *WZKM*, 1912, S. 244 ff.
- 6 E. g. A. C. Banerjee, *Sarvastivada Literature*, 1957, p. 247.
- 7 Cf. S. Beal, *The Romantic Legend of Sakya Buddha*, 1875, p. vf.
- 8 例えば『出三蔵記集』では「安公云方等部」(大五五、七中)とあり、『法経録』では「小乗修多羅蔵録」(同、一一九上)に置く。

(北海道大学大学院)